関係地名の由来雑考

後藤五郎調

〜愛知〜

万葉集に「小治田(をはりだ)の年魚道(あゆち)の水云々」とある。「あゆち」は田の湧き水に因んだ意かといわれ、「年魚市(あゆち)」とも書き、平安時代には「あいち」と変化し、「愛育知」「愛智」「愛知」の文字があてられた。名古屋市を含む地域が愛智（のちの愛知）郡と呼ばれていた。維新後、一時、名古屋県が生れたが、明治五年四月愛知県と改称された。名古屋藩を連想されるのを避けるため、県庁所在地の郡名を採ったと云われる。

〜尾張〜

「一宮の歴史」によると四〜五世紀ごろ年魚市県(あゆちあがた)・邇波県(にはあがた)が生れ、年魚市県の支配者尾張氏はその勢力圏を尾張北部にまで及ぼした。また、地名語源辞典によると、「おはり」とは開拓の意で、大和、河内に起こった尾張連(おわりむらじ)が兼ね治めた国を尾張の国と呼んだとしている。

〜丹羽〜

「丹羽郡誌」によれば、本郡は往古、邇波県と称し、日本武尊の後裔邇波の県君、本郡を領有すとある。また、「西成村勢覧」には、尾張氏と婚して尾北に覇を成せる丹羽臣、邇波の県君ら本村大字丹羽に住して尾北を治められ郡名茲に起ると記しているが、前記丹羽郡誌は、不詳と云い、その名義については邇波とは止水の象形にして、正字庭田之水(にはたみ)（雨が降って急に出た水（辞書による））を略して云へるなる可しとの説ありとしている。なお語源的には、県(あがた)は「吾(あ)が田(た)」で領域を意味し、郡(こほり)は古朝鮮語の KOHORU（大村）から来たものかと云われ、共に昔の中国の同義語をあてられたものである。

〜西成〜

一宮市史西成編によると、明治三十九年四月、町村治勢の興廃に鑑み、」全県下の一大併合村を断行する事となり、同年六月十六日県令第三十五号を以て、瀬部・時之島・穂波・赤羽・淺淵の五箇村十二大字を併せ、丹羽郡の西部に成立する意味に於て西成村と名づけ、七月一日より合併を実施し云々とある。なお村(むら)は語源的には、血縁的「群(むれ)」から地縁的「村(むら)」になったとも、また古代朝鮮の新羅の地名に村を意味する「牟羅」などがあり、朝鮮語で村を MAUL と云うのと関連があると辞書は云っている。村という字は中国の同義語をあてはめたものである。

～一宮～

「一宮の歴史」によれば、平安時代、国司が赴任した際、巡拝する神社の順位により、一宮・二宮・三宮と称し、尾張の国では真清田神社が一宮に位し、いつしかこの神社を中心に発達した村を一宮村と呼ぶようになった。

《出典：「瀬時の今昔」１６号　　昭和 55 年 1 月 15 日発行》